

明代の文人と西湖を味わう——高濂著『四時幽賞』試訳(下)——

湯 谷 祐 三

五、和刻本の刊行と『四時幽賞』の意義

前号の解題に付け加えて、そこで言及できなかった和刻本刊行のいきさつに触れ、あわせて『四時幽賞』を紹介する意義について述べておきたい。

和刻本『四時幽賞』には、本文の後に、寛永二十年(一六四三)の野間三竹の跋、寛文七年(一六六七)の林鶯峯の跋、年次未詳なるも恐らく寛文七年の人見竹洞の跋、そして寛文七年の野間三竹の跋、以上四つの跋文がつけられ、これらの内容を分析することにより和刻本刊行の経緯が明らかになる。

すなわち、林羅山の門人で幕府の奥医師である野間三竹は、かねて愛読する高濂の『遵生八箋』の中でも『四時幽賞』をもっとも見るべきものとして抜き出し、さらに画工に依頼してこれに絵を付した。それは寛永の末年(一六四三)までに完成しており、最初の跋文はこの時につけられたものであると推定できる。三竹はこれを文房の伴

侶として賞翫していたが、その絵の出来映えに満足できなかったようで、再度「良工」に依頼して、より良いものを描かせたいと願ったが、その画工は「宦事」（幕府の仕事）に忙しく、三竹の依頼は果たされなかった。

しかるに、幼少期より親交のある老中の板倉重矩（その老中就任は寛文五年＝一六六五）に訳を話すと、いわば鶴の一声によって五人の画工が集まり、たちまちに新たな絵が完成した。その画工とは、探幽斎守信、すなわち狩野探幽以下狩野家の面々である（守信・安信・益信・常信・時信）。そして、その装潢（装幀）には下総関宿藩主の板倉重常（重矩の従兄弟の子）があたり、清書は人見竹洞・狛庸・北嶋三立（雪山）が行い、最後に羅山の嗣子である鶯峯が後叙を添えて、寛文七年（一六六七）に完成した。

ここに登場する人物を見ると、幕府の学頭林家の関係者が中心となっていることに気付く。発願者たる野間三竹は林羅山の門人である。鶯峯は羅山の嗣子であり、寛文四年に設立された国史館において、『本朝通鑑』編纂の指揮をとっていた（寛文十年完成）。人見竹洞や狛庸は林家の門人で国史館の館員である。三竹は東上するたびに足繁く国史館へ通っていたことが、鶯峯の『国史館日録』の記事からわかる。北嶋三立は肥後の人。熊本藩の儒医で寛文七年には『肥後国郡一統志』編纂に従事していたという。長崎に遊学して黄檗僧より唐様の書を学んでおり書家としても知られる。鶯峯・竹洞らとも交際していたようで、跋文には三竹の「門人」とある。板倉重矩と三竹とは、重矩の追悼文集に鶯峯や竹洞と並んで一文を寄せるほどであった。

つまり、和刻本『四時幽賞』は、林家の周辺に集うごく親しい人間関係の中で刊行されたものである。彼らにとっては、漢文を読み、書くことが日常茶飯の業務であると同時に、また娯楽、息抜きなのであって、三竹の製作にかかる絵入り『四時幽賞』から、明代中華文人の自然観照の実態を学んだことであろう。

もう一つ見逃せないのは、三竹本『四時幽賞』に付された絵の作成には、老中板倉重矩の指示により狩野派一門が関与したという点である。狩野派三兄弟である守信・尚信・安信のうち、既に死亡している尚信を除いて、探幽斎守

信と安信が参加し、守信の養子である益信、故尚信の嗣子常信、安信の長男時信が加わっており、江戸前期狩野派の中核すべてが関わるという、まことに豪華なものであった。やはり、老中重矩からの直接の依頼が大きく働いたと思われる。江戸期に狩野派が関わった版本の画譜という点では、慶長年間刊の『帝鑑図説』に続くものとされる。

もちろん、三竹が製作を依頼した絵入りの『四時幽賞』は、画と本文が肉筆で書かれたものであり、おそらくは一点物であろう。その装幀は卷子本と冊子体のどちらの可能性もあるが、鶯峯が「一帖」と呼んでいることから、冊子体で本文と絵が対になった、つまり和刻本のような体裁の画帖であったとみるのが自然であろうが、残念ながら現存を聞かず、詳細は不明である。

この肉筆本『四時幽賞』をもとにして寛文八年七月に刊行されたのが、和刻本『四時幽賞』なのである。刊記は「寛文八年戊申夷則下旬、洛陽小川、林和泉掾」とする（夷則は旧暦七月の異称）。この林和泉掾とは、京都の書肆出雲路家のことで、幕府と公家の両方につながりを持ち、京都第一の格式をほこる版元であった。当時『本朝通鑑』編纂中の国史館にもしばしば出入りしており（『国史館日録』）、野間三竹自身この書肆から『桑華紀年』七卷や『本朝詩英』五巻などを刊行している。現在『四時幽賞』の和刻本は、国文学研究資料館や早稲田大学など、いくつかの公的機関に所蔵されるが、その影印は刊行されていない。和刻本を見る限り、その書体は版本に通行の書体で、一筆であるように見え、とても三人の手が入っているようには見えないし、各章ごとに付けられたそれぞれの絵についても、参加したという狩野派五人の誰によるものかは全く区別できない。

三竹のために狩野派を動員した老中板倉重矩についてもふれておかねばならない。重矩は寛文八年の五月に京都所司代に任命されており、同時期に刊行された和刻本『四時幽賞』を手にしたことであろうが、この重矩が、所司代在任中の約二年半の間に、『牧民忠告』『荒政要覧』『新註無冤録』という三種類の実用的な漢籍を、無刊記本で和刻刊行したことが最近判明し、既に報告したところである（本誌四五号・四六号の拙稿参照）。重矩がこれら三種を

どこから刊行したかについては、無刊記本であるが故に定かではないが、如上的ような人間関係からすると、やはり林和泉掾からの刊行と考えるのが自然ではなからうか。ちなみに重矩が生前に刊行をくわだて、その死後に刊行された『居家必用事類全集』の版元は林和泉掾である。

さて、野間三竹があえて『四時幽賞』の刊行を発願したのは何故か。それについては、三竹自身が寛永二十年八月の跋文で語っている(原漢文)。

高深甫氏(高濂)の書いたものだけを持って小堂に坐り、小冊子を開けば、花や雲が目の前に広がり、雪や月が後ろに行き交う。この身、この心のままで、林泉に入り、高山に遊ぶようである。巻を開いている間は、茫然として世間のことを忘れる。後にこの作品を読むものは、どう思うだろうか。

注目されるのは、三竹が自然そのものを、『四時幽賞』という文字テキストを通して、世事を忘れるぐらいに楽しんでることである。彼は決して西湖に関する知識を獲得しようとして頁をめくっていたのではない。

前稿の解題で述べたように、『四時幽賞』の編者高濂はそれまでの西湖文献とは全く異なり、「西湖」に堆積した歴史的事項や文学作品を主体として持ち出すことはなく、あくまでも彼自身が西湖の自然そのものの中に身をおいて感じた印象を詳細に記している。彼が取り上げる多くの自然美は、高山から見た朝日にしても、雪景色の湖水であつても、必ずしも西湖でなければ味わえないというものではない。一方で、春夏秋冬全四十八箇条に及ぶ、これだけの自然美を一箇所で鑑賞できる場所というのは、中国広しと言えども、やはり西湖に指を屈する、ということもまた事実であろう。つまり西湖とは、かように「個にして普遍」な性格をもった得難い舞台なのである。

後輩の人見竹洞がその跋文の中で羨望するように、三竹自身、京都北山の郊外白雲溪に山荘をかまえており、普段から自然に親しむことのできる環境にあった。林鶯峯はその跋文の中で、三竹の心中を推し量り、いみじくも次のように指摘する(原漢文)。

ここ(白雲溪―引用者注)で、この図を開いて高濂氏の異朝におけるその様子をよび起こせば、目覚めては高氏と志を同じくし、眠れば高氏と同じ夢をみる。すなわち、高氏が三竹であるのか、三竹が高氏であるのか、わからなくなる。

西湖の自然そのものを深く味わうことによつて己の心身を養い、ついには西湖と一体となつたかのごとき観のある高濂の『四時幽賞』であるが、これを読んだ三竹もまた高濂と一体化して、自分の目で自然そのものを楽しむ術を身につけたのである。三竹は高濂から、自分と自然との間に何者をも介在させない自然観照の態度を学んだのだ。

日本には、すでに室町期より、狩野派によつて大画面に描かれた西湖図屏風などがいくつも存在することから、それらの絵を通して西湖の姿を想像することは困難ではない。しかし、一人の人間として、現実の自然そのものに接する時、いったいそれをどのように受け止め咀嚼したらよいのか。辞書の知識による解説ではなく、どうすれば自然の本質そのものを味わうことができるのかについてはこれまで誰も教えてくれなかった。三竹はまさにその点において『四時幽賞』の特色を発見し、和刻本刊行によつて広く世に知らしめようとしたのである。

目次(秋・冬)

秋時幽賞十二条

- 25 西冷橋畔醉紅樹 26 宝石山山下看塔灯 27 滿家巷賞桂花 28 三塔基聽落雁 29 勝果寺月岩望月 30 水榭洞雨後聽泉 31 資巖山下看石筍 32 北高峯頂觀海雲 33 策杖林園訪菊 34 乘舟風雨聽蘆 35 保叔塔頂觀海日 36 六和塔夜玩風潮
冬時幽賞十二条

- 37 湖凍初晴遠泛 38 雪霄策蹇尋梅 39 三茅山頂望江天雪霄 40 西溪道中玩雪 41 山頭玩賞茗花 42 登眺天目絕頂 43 山居聽人說書 44 掃雪烹茶玩画 45 雪夜煨芋談禪 46 山窓聽雪敲竹 47 除夕登吳山看松盆 48 雪後鎮海樓觀晚 49 附遊說

訳文

秋時幽賞十二条

25 西冷橋のほとりで紅葉に酔う。(西冷橋畔醉紅樹)^{*25}

西冷は湖の西、橋のかたわらにある。唐一庵先生の墓もここにある。そのまわりに楓や柏が数株あり、秋になると霜は紅色に、霧は紫色に染まり、入り交じって林となる。その姿は夕陽に映えてあざやかにつややかで人の目を奪う。時には小舟に酒樽を積み込み、橋にあがり風景を鑑賞して詩を吟じる。あるいは一つ二つの新しい句を得て、携えてきた袋から紅葉を出してこれに書き付け、風に向かって水に投げると、水面に浮かんで流れにしたがい、どこまで漂っていくのかわからない。風雅な気持ちが湧き上がってきて人の心を乱す。月夜の中で紅葉に対座すれば、露にうるおって紅色がさらに鮮やかになる。朝もやに目を凝らして眺めると、朝焼け雲のように日に照らされて美しい。どうしてただ、「紅葉は二月の花に勝る」とのみ言えようか。

西風が起ると一葉が飛び、酒樽の前に落ちる。それは秋の気配が人を憐れんでいるかのようだ。わたしの高揚した歓びと豪快に酒を飲む楽しみは、大空の中にしぼんでいく。(落葉が)ひらひらとひるがえると、気持ちは冷めて静まってゆく。なぜ、紅葉はわたしをとりこにしたのだろう。気にかかるのは、いつの日にかそれが枯れ朽ち、碎かれて焚きつけとなり、西冷の秋の光景を、「色即是空」にしてしまうことだ。さらに惜しいのは、肉眼に見える姿が留まらず、つまるところ「空」になってしまうことだ。いったい誰が、紅葉のために生死の大法則をうち破ることができようか。いつか因果がめぐってきたなら、わたしはつかの間の命を傷む文を作って弔いとしよう。

26 宝石山のおもとの塔灯を見る。(宝石山下看塔灯)^{*26}

保叔塔は省内のもっとも高い塔である。七層で灯火を燃やす。その周りに百個の灯明が星のように入り交じり、

煌々と輝いて空を照らす。目を高く凝らせば、ぼおつとして空の中から落ちてきたようだ。ともし火の影は湖面に映り、また一つの色相をつくる。えびの鬚のようににはるか遠くまでのびて、長い虹のようにゆらゆらとなびいている。夜は静かで水は冷たく、灯火はみずちの洞窟までも照射する。さらに嬉しいことには、風がさわやかで湖水は白。おごそかに鵲の橋を渡り、翼を生やして、はやく天の川を渡りたいと思った。するとたちまち、鐘や磬の音が中空に聞こえ、清らかな読経の声が天から発し、わたしの欲望や世俗の塵を一度にうち破り、清浄でとらわれのない境地にしてくれた。

27 満家巷で桂の花を観賞する。(満家巷賞桂花)²⁷

桂の花がもつとも盛んに咲くのは、南山の龍井に多いとされる。そしてこの地が満家巷と名付けられたのは、その桂の林が城の壁のように高く、櫛の歯のように密に並んでいるからだ。一村すべてが花を売ることを生業なりわいにしており、省内の各所は(すべて)ここから取り寄せている。

秋になると、足の弱い驢馬にむち打って山に入り花を見る。数里離れたところから、すでに清らかな香りに触れる。小径に入れば、珠英(桂の異名)の樹木がそびえて、香りが人の気配のない山中に満ちている。こころよく奥深いおもむきを味わえば、靈鷲山の金粟世界に入ったかのようだ。

龍井の村で水を汲んで(桂花を)お茶に点でて、さらに僧院の厨房から山の野菜などをもらって、おかずにも作る。仙遊の友といっしょに大いに食せば、からだの中全体が花の香りで馥郁となる。帰りに数本の枝を携えて、書斎の昼寝の友とすれば、心は清く精神は解き放たれて、夢の中でもなお花の境地にすることができる。

昔から聞くところでは、聖なる桂の木が月の中に生えているというが、はたしてどうであろうか。もし、広寒宮(月の中の宮殿)に桂が生えているというなら、かならず、雲のかけはしを天への通路にして、その枝を折ってみた

いものだが、どうしてもいつも、平地（人間世界）でばかり（それが）盗まれているのであろうか。疑わしいものだ。

28 三塔のもとで落雁の声を聞く。（三塔基聴落雁）²⁸

秋風が吹くと雁がやってくる。彼らはただ水草が生えて広々としているところを選んですみかとする。湖上では三塔の基底部が草が豊かで沙場が広く、雁が群がり鳴き交わして舞い降り、渡りの陣形を解いて休息する場所となっている。舟を仕立てて夜に坐って聞くと、居場所を争い、魚をついばむことを争って、その姿は湖上にただようもやを乱している。水面に宿り（湖面に映った）雲の中に眠って、その鳴き声は月夜に凄絶に響く。三塔の基底では、雁の玉をころがすような鳴き声が遠くまで澄みわたり、秋の声で耳が満たされる。これを聞けば、みな黙りこんでしまう。

思いがけず、ある夜、西風が吹いて山の頂上の樹木を冷やして紅葉させ、湖岸は露で寒々と真っ白になる。この知らせを聞くと普通の人は喜ばないが、ただ幽賞の趣味を理解するものだけが（渡ってきた雁の声を聴くという）楽しみを共にできる。かの、鶏の声を聞くと起きて舞った人や、ほととぎすの声を聞いて世の転変を予感したような人こそが、この世の中に志がある人と言えるのであろうが、そうすると（雁の声を楽しんでいるだけの）わたしなどはさしずめ志がないということになるのか。

29 勝果寺の月岩で月を望む。（勝果寺月岩望月）²⁹

勝果寺の左の山に石の壁が削ったようにそそり立つ。そこに一つの穴がうがたれている。その丸いことは鏡のようだ。中秋の名月が満ちると、その穴を通して光が差し込む。穴の内からこれを見ると、その光はまるで穴と一体になったようである。秋には詩の友や酒の友といっしょにこれを清賞する。さらに耳をすませば、多くの谷々の溪

流の音や、空に満ちる海の色が見えて、一種の俗世間を離れた境地での、本当の月見の楽しみを自得する。左には、むかし宋代の親衛隊に武術を教える教場があった場所がある。親衛隊が護衛していたところで、宮城の重要地点であったが、今では荒廃した辺鄙な場所となった。

どうして、この鏡の隙間から見る晴れたり曇ったり（の繰り返し）は常に継続していて、太古から決して途切れることがないのか。つまらない人間世界の興廃は、この岩の穴の目の中にすべて入ってくる。人の世はからかわれているようなもので、冷やかな目でひそかに笑われているだろう。

30 水楽洞で雨のあとに泉声を聞く。（水楽洞雨後聴泉）³⁰

洞は烟霞嶺のふもとにある。その中は広く開けており、谷は奥深く広い。山の泉の水が分かれて流れこみ、洞の隙間から点滴する音の響きは金石をたたくようである。またその水の味わいは清らかで甘く、さらに雨が降った後は、泉の水も多くなる。滴下する音の清らかで涼しげなことは、いかなる音楽の演奏よりもまさっている。

わたしはここに来るといつも、泉を飲んで脾臓をひたし、石で歯をすすぐ（ことで隠士の志を改めて高める）。それで思い出すのは、蘇軾の「ただ人氣のない山の石の壁に向かい、この囁々と流れる誰にも使われていない清流を受け止める」という詩句や、「これを薰風絃の曲に写し取る必要はない。たとえ、この音を写し取ったとしても、それを聞き分ける耳がないからだ」という詩句だ。われわれにどうして耳がないなどと言えよう。しかし、実は耳で聴くのではなく、心で聴くべきものなのだ。

31 資岩山 のふもとで石筍を見る。（資岩山下看石筍）³¹

資岩山は靈隱寺の西の方の崖の下にある。そこに岩があつて形は筍のようである。形は丸く削られ、他よりぬきん

で高くそびえ、その高さは百尺ばかりである。するどくがっており、つやつやと光っている。空をしのぎ、雲をつらぬく。さらに面白いのは、四方の山々がまるで笠になった花びらで、そこから薬を吐き出しているように見えることだ。表面にはしわ模様が波立っており、高くけわしく折れ曲がり、細やかに穴がうがたれ、深く貫通している。樹木が岩にまわりつき、それらはみな岩の穴から突き出ており、土がなくても自生している。

古くからこの山には玉が包まれていると聞いている。それで岩がこのように豊かに潤っているのだ。ただ、山石の間の水の跡や波紋については、これがどうしてできたのか、また、いつからあるのかわからない。いわゆる「滄海桑田」というものではなからうか。さらに前後の石の壁が愛玩されていて、唐宋の遊客たちが多く名を刻んでいる。ここから進むと、楓の林がこんもりとして、秋の色の変幻自在なるさまは、まさに奇観というべきであるが、山は奥深くてけわしいので跋涉するのは困難だ。時には、酒をもって行き、思いきり飲もうではないか。雲によりそい、声を長くして詩を吟ずれば、山や谷も驚いてこだまが答え、わたしの景観を楽しむ能力を数倍増してくれる。

32 北高峯の頂上で海雲を見る。(北高峯頂観海雲)³²

北高峯は西湖の山々の中では第一の高峰である。その絶頂から、ぐるりと周囲数里を眺望することができる。左を見れば、澄んだ湖面が化粧箱を開いたようにあらわれ、その鏡が月のように明るく光っている。右を見れば、長江の波が縄の紋のように打ち寄せて天の川のようにもあり、玉のみずちが曲がりくねっているようでもある。

前後に並ぶ城郭や住居、郊外の野原や村落は果てしなく広がり、一片の紙に画かれた絵のようで、鱗のようにびっしりとならんで、黒や白が点々と連なっている。なんと盛大なることだろう。眼中の壮観というべきだ。またたくまに日の影が西に傾き、海の雲が東からわき起こり、ほのかに眺めると、霧がかってかすみ、もやが入り乱れてめぐり、あるいは美しく重なりたたみこんで半天を横切っている。その交じり合うさまには限りがない。四方の夕暮

れの山々に霧が立ちこめて薄暗くなる。

まさにここは地上を去ること千尺、俗界を離れること数里、それでわかったことがある。足で天の風を踏み、目に見える処は家からどれだけ隔たっているのかわからない。いわんや、わたしはひと時の人生の旅人であって、もともと差し障るものなど何もないはずだ。それなのにどうして、俗縁の束縛を受けて、浮き世を離れた想念をめぐらさないのか。

33 杖をひいて園林に菊を訪ねる。(策杖林園訪菊)³³

菊は花の隠者である。ただ世を逃れた有徳の人や山中に逃れ住んでいる人の家にこそ、これを植えることができる。だから多くは見るできない。見たところで豊かで美しいというわけではない。秋が来ると、杖に助けられて、あまねく杭州城内の園林や山村の垣根を訪ねる。

茶を入れる童子を連れて花の主人に面会を申し込み、いっしょに花を見て優れたものを談論し、あるいは花の品格を論評し、栽培方法を比較し、詩を詠んで応酬し、酒をなかだちとして互いに勧めあい、杯をもつて月に対座し、とし火をたいて花に酔いしれる。客も主人も歓びをつくし、花に別れを告げることができない。朝が来るまでそうして過ごすことを厭わない。この興趣はいったい何という楽しい時であろうか。東の籬まがきのものと菊は採るべきである。永遠に南山を悠然として見る。すぐれた人柄や隠れた人徳を尊ぶならば、どうして世をあげて陶淵明を渴仰しないのか。

34 舟に乗って風雨の中で蘆あしの音を聞く。(乗舟風雨聴蘆)³⁴

秋が来ると、風や雨の音は人を哀切な気持ちにさせる。蘆の中で聞くその音がもつとも凄絶である。わたしが河橋

(という町)で眺望すると、蘆が生えているところは一面真っ青で境界がない。家に帰って寝ていると、そのざわざわという音を思い出した。杭州(の近く)では、独山・王江涇・百脚村に蘆が多い。

時まさに風雨が降り続いた日、一人で舟に乗り、舟底に臥して秋の声を聞く。あちらこちらで風がさびしく吹きすさび、蘆の茂みは青々として、風にざわざわと音を立てている。雁が落ちて鳴き、鷺が美しく飛ぶ。風がわきたち、雨がしたり落ちる。

こうして、耳はさっぱりとして心は自得する。興趣を奥深いものに寄せて、思いを静かな楽しみで満たす。この舟の中の人こそ、もつとも俗塵を離れた阿羅漢様と言えるのではないか。やかましく煩わしい煩惱の業火を避けて、ものさびしさをうれしく味わおうとするものは、まさにこのようにしてその心を降伏こうふくすべきであろう。

35 保叔塔の頂上で海から昇る朝日を見る。(保叔塔頂觀海日)^{*35}

保叔塔の遊客がその頂きまで登ることはまれであるが、よく七階を登り尽くせば、四方を眺望して心がさわやかになる。初秋のころ、夜に僧坊で宿泊し午前四時に起きて塔の頂上に登り、東を望めば海に昇る朝日がまさに出ようとするところである。紫の霧がさかんに湧き上がり、金の朝焼け雲が広くただよう。天をめぐるその光彩は、長い練り絹を横たえたところに、丸い車輪を走らせるかのようである。あるいは、虎や豹がはね飛び、鳳凰や鶴が飛び舞うようである。五色の鮮やかな色彩はまたたく間に様子を変え、幻のように瞬時に様々な姿に変化する。

しばらくして、太陽が炎を吹いて無数の山々が赤く染まる。金輪は海からひらめき出て、火の鏡が空に浮かび、夜が明けてかがやき照らされる。赤い炎が光り輝き空一面を満たす。流れる光が赤くかがやいて地面を熱する。この時、ただ金星だけが東のほうにあり、明るい玉のようにきらめく。もろもろの星は、はつきりと見えなくなり、ついに姿を消した。長く遠望して時間を過ぐすと、わたしの目は乱れ、心は騒ぐ。にわかにもものぐるおしく叫べば、声

が遙かなる天を振るわす。

たちまち計ったかのように、鶏鳴が告げられ、木々に眠る鳥がかまびすしく鳴きだす。大地の雲は開け、露の華は白く光る。城市を見渡せば、慌ただしい塵埃や騒音がわき起こってきた。空にただよう秋の涼気が人にせまり、その気配は厳しく、とどめることはできない。わたしは塔から下りて息を休め、心を落ち着かせる。それでも目の中にはまだ、雲や霧の目をくらますような色彩が残っている。

36 六和塔で夜に風と潮を楽しむ。(六和塔夜玩風潮)^{*36}

浙江の潮のみなぎりをみるために、人は多く八月より昼間に觀潮するが、夜の觀潮の楽しみを知っているものは少ない。わたしは昔、寺で法会を修して塔に灯火を点灯した。夜半の月の光が空に横たわり、錢塘江の川の波は静寂をたもってゆっくりと流れ去り、月の光を吞み込み、また吐き出しているようで、これはこれで一つの奇景であった。しばらくして、風が急に寒くなり、海門に潮が盛り上がってきた、月の光と銀の波の光とが揺れて、雪のようなしぶきを飛ばす。雲が岸にかかり、波はとどろき渡るかみなりのような音を立てて巻き上がる。白い練り絹のように風が吹きおこり、走り飛んで曲がりくねる勢いは、まるで山岳の間に声が響き渡るようで、その音は聞くものの毛や骨をそばだたせる。昔から「十万の軍勢の鬨の声と夜半の潮の音」というが、まことにその通りである。目に見えるものはすべて心をおどろかす。

それと思うのだが、その昔、あちこちに遊んでいたわたしは、水と空と共に漂泊し、潮にしたがい波を追って、いつの間にか、浮かび漂うような世俗の人間になっていた。今深く考えて初めてさとった。これまで名声と利得(を求めた)がいかにかに本当のわたしを誤らせることの少なくなかったかを。波の中にいくつかの点が浮かんできているが、これらはみな、あちらこちらへと行き過ぎる舟の群れではないか。悲しいものだ、この「名利」という二文字

は。人間をもてあそび、その虚言をかつてどんな英雄も打破することはできなかった。すべては名利の夢によって、波や風の中に泥酔して、人が呼び覚ます声を受け入れようとはしないのだ。

冬時幽賞十二条

37 湖が凍ってから初めて晴れた日に遠くまで舟で遊ぶ。(湖凍初晴遠泛)³⁷

西湖の水は厳寒でなければ凍らない。凍ってもそれほど堅くならない。結氷してから初めて晴れた日には、朝日がきらめき輝く。湖面では氷がとけ、玉のように点々と浮かぶ。その時に小舟を操って氷をたたき割りながらあちこちに遊ぶ。氷が開いてできる水路は、舟が長い蛇を引いているようである。氷は明るくひかり、くるくるとひっくり返り、積み重なる。家の者がうまく氷の固まりを砕き、手でもち上げてかんかと音を立てて投げると、その音は百歩先まで届く。まるで星が流れるようである。あるいは、激しく打たれてこなごなに砕かれたかたちは玉の屑が飛ぶようだ。大いに寒中の見物となる。奥深いこの楽しみはおそらく人の同じくするものではないだろう。

船端をたたいて長く歌い、酒をとって豪快に飲み干す。陽春の満ち足りた思いにひたり、白雪が我が友であることを思えば、凍った湖面や雪の積もった岸の寒さも忘れるのだ。昔から、春の氷をわたることを戒めると聞か、胸中に恐れる気持ちを持たなければ、必ずしもそのように戒める必要があろうか。

38 雪が晴れ足の弱い驢馬にむちを入れて梅を尋ねる。(雪霽策蹇尋梅)³⁸

絵画において、春の郊外に馬を走らせたり、秋の溪谷で釣り糸を垂れたり、あるいは足の弱い驢馬を引いて梅を見に尋ねるというような画題では、(画中の人物の)衣の色を朱色にしないということがない。どうしてそのようになったのだろうか。それは景色の飾りともなり、時宜にかなって超然と俗世を抜け出したおもむきがあるようだ。ま

た、朱色の衣で遊山するようなものは普通の俗客ではない。だから冬三ヶ月の間は、紅色の毛織りの衣を着て、毛織りの笠をかぶり、黒い驢馬にまたがる。かむろ頭の童子が酒樽をぶらさげてつきしたがう。溪山の雪を踏み、梅を林や谷に尋ねる。梅の花数株に出会えば、すぐに梅のかたわらに席を占め、杯を手に取り劇飲沈酔する。酒に酔い陶然とすれば、梅の香りが袂にただよい、この身が花の中にいるのか、それとも花が目の前光景であるのかわからなくなる。

ところで、足の弱い驢馬で梅を尋ねたり、角をとった子牛（に乗ったりすること）が、長安の豪勢な車馬に比べて、寒々しく下賤なものであろうか。（そのような豪勢な車馬に乗ってはい）人々にあざけられることだろう。つまるところ（わたしは）幸いにして前人のあやまちを免れたのだ。

39 三茅山の頂上から空と湖水の晴れた雪景色を望む。（三茅山頂望江天雪霽）³⁹

三茅山は杭州城内の高いところで、湖水をめぐり囲んでいて、その景勝たることでは、もつとも楽しい場所である。時あたかも雪が積もってから初めて晴れた日、まばらな木々がすつきりと開け、湖水は遙かに広がり、寒いもやが山をめぐる。幾重にも積もった雪景色である。湖水に浮かぶ舟の帆が片々とひるがえり、風が銀色の梭のような船を吹き渡す。木々の生えた家々は、（雪に覆われた）玉のような瓦が寒々としている。山の小径には人跡が絶え、板橋の通路では、白い帯がひるがえるように車が行き来している。木こりの歌が東の谷に響き、釣り人の蓑は凍りつく。

雲に飛び去る鳥を目で追いながら、遙かなるものへのわたしの思いに極まりがないことを感じた。時には、坊さんからお茶をもらい、雪をとかした水で煮る。村の地酒が芳香を漂わせている。かたわらの何本かの梅の木は、我々の清賞をいよいよますます助けてくれる。

40 西溪への道中で雪を楽しむ。(西溪道中玩雪)^{*40}

先年、雪が晴れたので、たまたま西溪に行ってみた。どうして、俗世間を離れた美しい景観を見ることができな
どと予想できたであろうか。日は出てきたが、雪が積もって融けておらず、竹は眠ったように枝を地に垂れている。
山は白く雲がわきのぼる。風がめぐり雪が舞って馬を打ち、馬はいなくなり、凍った枝から、玉のような水滴が落ちて
衣を濡らし、湿っぽくなる。遙かに一面の梅が満開になつていて姿を思い描いてみる。目は飛び交う花に幻惑され、
わたしは人の通う道よりも遠くへ分け入り、雪の積もった道を踏破すること十里、生涯、雪景色をこれほど快く味
わったことは少ない。

それと思うのだが、雪山を歩く苦行のありがたい結果は、忍耐によつてのみ得られるのだ。我々はしばらくでも
(冷たい) 風に当たると、すぐにいろいろを囲んで酒に酔うことばかり考えてしまう。ああ、ほしいままの欲望のなん
と甚だしいことよ。たとえ、まだ奥深く冷めた思いで心をおさめることができなくても、冬の清らかな寒さで骨を
錬成するべきなのだ。

41 山の頂上でお茶の花を観賞する。(山頭玩賞茗花)^{*41}

両山でお茶を植えているところはすこぶる多い。旧暦十一月になると花が咲き、まるで月の光が木々の中に籠もつ
たようだ。いつも、山に入ってお茶の木を尋ね、景色のよいところでは、花に对座して黙ってその色彩を楽しんでほ
は笑む。すると一種の奥深い香りがして人の心になうのだ。また、花は白く、雲のあやぎぬを切ったようで、中
心は黄色で、おごそかに檀木の小片をいだいているようである。帰るときには、数本の枝を折って持ち帰り、瓶に
挿して書斎の供とする。枝も花びらも夢も、つぶつぶとして、いっぺんに開き、ひと月は清玩することができ
る。

さらに嬉しいのは、その香りがわたしの枯れた詩心にしみわたり、その色彩がわたしの親しげな眼差しにやさし

く答えてくれることだ。美しい白さと、寒い頃の香りは、春風とはおのずからその姿態を異にする。奥深い閑居に歓迎する客としては、いったい何が君にまさろうか。

42 天目の絶頂に登って眺望する。(登眺天目絶頂)⁴²

杭州の様々な山々は、みな天目山から分かれ発している。だから『天地鈴経』には「天目山は生まれつき両方の乳が長い」(天目生来両乳長)という偈文がある。冬の日、木の葉が落ちるころ、天目山で山を見る遊びに出かけた。天気は晴朗で、もやや雲はすっきりと吹き払われている。杖に助けられて嶺を踏み、四方を望めば、その眺望は限りない。両山が東にのびて、高く低く起伏してまがりくねり、さかんに駆け上がって、河に至ってはじめて尽きる。まことに龍が翔け、鳳凰が舞うようだ。目を凝らすと、練り絹で横に境を隔てたようになってるのが銭塘江で、それより彼方に茫々と広がっているのが東海である。

あの群がり生えているのは、松だろうか、竹だろうか。山寺の坊さんは指さして言う、あれは宋代の王侯の廃れた墓ですと。ああ、山川の景勝は永遠に移り変わることはないが、王宮は黍畑となり、陵墓は丘や谷となって、今にいたるまでどれだけ変遷したことであろうか。(そう思うと) ふたたび慨嘆するのだ。

43 山居して人が書を説くのを聴く。(山居聴人説書)⁴³

老人は寒さを恐れて世間づきあいをしない。時には山中の住居で背中を暖め、かやぶきの軒に梅が初めて咲くを見る。隣家の友人は話が上手なので、餅を炙っていつしよに食べながら、『水滸伝』の宋江のくだりの話を聴くのがとても面白くて章段を重ねてしまう。楽しくなり拍手して日が暮れたのもわからない。

道ばたの大きな石碑や、世の中の碑銘などを見るに、(そこに記されているのは)『水滸伝』に関することばかり

だ。これらは果たしてみな真実であって、うそではないからこそ説かれているのだ。ただ惜しむらくは、この老人の伝承が世の中の人口に膾炙する伝承と全く同じというわけではないことだ。

44雪を掃いてお茶を煮て絵を楽しむ。(掃雪煮茶玩画)⁴⁴

お茶は雪を融かした水で煮れば、味わいがさらに清冽になる。いわゆる溜まり水のようなもので、塵や汚れを受けていない。世を避けて暮らす隠者は、これを啜れば寒さにうち勝つのに充分である。時には南の窓辺に差し込む日の光が暖かで、寒風に悩まされないことがうれしい。静かに古人の画軸を開く。「風雪婦人」「江天雪棹」「溪山雪竹」「関山雪運」などの冬の図を見る。こうした絵を見て、実際の風景に對してみると、古人の自然模倣の筆致がよくわかる。実際の風景も、そして絵図も、共に造化の神のはからいであることを知らねばならない。

わたしは絵を手にとって思う。これは人が景観を楽しんだものだが、景観のほうからわたしを見れば、わたしが景観の中にいるのではないか。(このことから類推すると) 大昔からの俗塵の因縁も、いったいどれが「真」で、どれが「仮」だと決めつけられようか。図画を観ることで真実を悟るべきだろう。

45雪の夜に芋を焼いて禪を談じる。(雪夜煨芋談禪)⁴⁵

雪夜にたまたま禪寺に宿り、僧と共にいろりを囲み、少し山芋を炙って剥き、口に入れば、その味わいは世の中の美味とされるものよりもはるかに美味い。喜んで食べて腹一杯になると僧に尋ねた。「有為」は禪でしょうか。「無為」は禪でしょうか、それとも、「有」も有るのではなく、「無」も無いのではない、それが禪でしょうか。僧が答えた。あなたが手に芋を取れば、それが禪です。どうしてお尋ねになるのですか?。わたしが言う、どうして芋が禪のですか?。僧が答える、芋はあなたの手にあります。それは「有」ですか、「無」ですか?。「有」と言

えば、何が有るのですか、「無」と言えば、何が無いのですか?。「有」「無」があいともに滅するのが「真空」なのです。空でもなく、空でもないことはなく、空の空なることがなく、これを名付けて禪と言います。空にこだわって禪を理解すれば、それはまた実相真如に執着することであり、禪は理解できません。これは精進努力の力で到達し理解できるものではないのです。また智慧の力で速やかに悟ることのできるものでもありません。

あなたは、どうして芋を見ないのでですか?。芋は火が通らなければ口に入れることはできません。火の効果がなければこの芋はいまだに生のままです。火が通り芋が熟することによって、芋は歯や舌で食べられ消滅する。これは「有」から「無」に帰したのです。芋が火で熱せられなければ、あなたは生のままで芋を咀嚼することができません。芋の実相は、ついに滅亡しないところにあります。芋を手にして咀嚼すればなくなります。いわば、「無」でないことは無い、ということですが。「無」は「有」より生まれます。いわば、「有」は「有」にあらず。「有」は「無」により滅します。あなたは手に芋をもっているのに、さらに今何に執着しておられるのですか?。

わたしはその時、弥勒菩薩を譬首礼拝した。「禪」は、言葉が終わるとすぐに呼び覚まされた。

46 山居の窓辺で雪が竹をたたく音を聴く。(山窓聴雪敲竹)^{*46}

風に吹き飛ばされて降る雪の音は、ただ竹林の間で聴く音がもつとも雅である。山居の窓辺で寒夜に雪が竹林に降る音を聴く。その音はものさびしくひるがえり続ける。その響きは悠然としてわたしの清聴を楽しませる。うずを巻くようなつむじ風が急速に吹きつけ竹を折った。その一声がわたしの寒衣を一層冷え冷えとさせる。ひそかに思う。豪華で立派な家に住む人は、美しい楽の音に酔いしれているが、恐らくこれは、彼らがよるこぶような音ではないだろう。

47大晦日に呉山に登り松明を見る。(除夕登呉山看松盆)^{*47}

大晦日に、ここ杭州城の住民は、家毎に柴木をからげて、祖先を祭るかがり火をたき、火の光が天を照らす。太鼓を打ち、鐘を鳴らし、爆竹を発し、火を焚く。これを「松盆」という。言うまでもなく、他の場所のものとは比べものにならない。また、杭州郊外の村々にも、このような壮観はない。

この時、奥深い興趣を理解するものは、呉山に登って高く広く南北を眺望する。紅の光が道々にあふれ、炎や火の雲が街路を分かち、光が市中の境界を示す。耳にはかまびすしい声が囂々と聞こえて震動する。遠く近く目に触れるものは、星のように入り交じって上下している。この光景こそまさに奇観といふべきだ。ひそかに高いところに登って囂々たる雑踏を俯瞰すると、わたしの身体が上界にあることを実感する。

48雪の後、鎮海楼で夕餉の煙りを見る。(雪後鎮海楼觀晚炊)^{*48}

城市すべてに雪が降り積もると、家々の屋根瓦が銀で葺いたようになる。鱗のようにびっしりと並び、高いものも低いものも、ことごとく玉を盛り上げたようだ。その時、高い楼閣に登って目を凝らせば、見える限り、あとかたもなく大地は真っ白であった。日が暮れると、夕餉の煙りが無数に四方から立ちのぼり、細く長くたなびく様子は、玉版紙に烏絲欄の界線を引き、幽勝の地を画したようだ。素晴らしい景観は、わたしの冷めた視覚をもよこばせる。おそらく、この光景も未だに人の知り得ざるところだろう。

49四季の行楽の説(附遊説)^{*49}

高先生は言う。陽春の候になると、やわらかい風におだやかな風景となる。花咲く樹木には鳴き交わす鳥がいて、友を郊外に迎え、青草を踏んで酒を携えて、湖面に舟を浮かべる。柳を求め花を尋ねて、鳥の鳴き声を林間に聴き、

山を見て水を楽しみ、曲水で褌ふんどしを行なう。香る堤を盛んに愛で、都の市街に酔って眠る。銭を杖にさして酒を買えば、陶然と気持ちよく酔って名利を忘れて自適し、風の中で舞い、草をしとねにすれば、花の中に坐して楽しみも極まる。歩きながら歌をうたい月光を踏んで、美しい水鳥が砂地で眠るのを見て楽しみ、かもめや鳧かりが波間で水浴びするのをうらやむ。夕陽が山の端にかかっても酒の楽しみはまだ足らず、春風が座に満ちて、酔わなければ帰ることではない。これらがみな春の日の楽しみなのだ。静かに「少年の春」を学ぶというのは、まさにこの時期のことだ。

夏は、襟を開き、髪を散らして、冷めた眼で声を長くしてゆつくりと歌う。生きているうちには、松やひさぎなどの墓地の緑陰も心地よく、舟を浮かべれば、芰ひしや蓮が清らかに馥郁と香る。客も主人も互いの区別を忘れ、からだから自意識がなくなる。青い竹の筒に入った酒はさわやかで、白い蓮根は涼味を生じる。喧噪の俗世を避けて水辺のあずまやで穏やかに一眠りすれば、初夏の風に吹かれ、ものうげでまことに心地よく、山の楼閣には峯々から雨が送られる。わたしは冷めた視線をさまよわせて、その奥深い興趣には俗気がない。ひっそりとして、のびのびとしたこうした楽しみの何と多いことだろう。

秋は、高いところに登り、声を長くして歌をうたい、水に臨んで詩を賦す。酒に菊の花を浮かべ、紫の蟹を供える。車を楓の林の中に停め、酔って白雲のかたまりの中で寝る。楼閣に登って月を吟じたという、飄然たる陶淵明の高潔で閑雅な態度や、頭巾を落としても（気にすることなく）風に吟じたという、損なわれることのない孟嘉のこだわりなき心の広さよ。波を渚に鑑賞すれば、楽しみは雪の波や雲の波を求めて広がり、雁の声を渚の砂の上に聴けば、思いは蘆の茂みの夜のおよぶ。ひっそりとした自然の素朴な味わいと、さわやかですがすがしい心の思いは、これを他の季節とくらべても、さらに閑静で雅致のあるものだ。

冬は、藜あかぎの杖をついて、ひなたぼっこしながら、東の疇うねで穀物の刈り入れを見たり、足の弱い驢馬に乗って、寒さをついて梅の開花を南の道に探ったりする。雪が降れば、飛び舞う白玉に眼を驚かして、村の地酒に酔いしれ、晴

れば、重なつた氷を踏み、僧院で朗詠の声をあげる。舟を浮かべて月をめれば、興に乗って（王子猷のように）剡溪の村まで漕ぎ到り、寝台に酔い臥して雲にかこまれて眠れば、夢に（崑崙山にある）玄圃のような寒さを感じる。

さて、西湖の上に舟を浮かべる簑を着た漁師が（居ながらにして）人間界の森羅万象を了解することにまさるものがあるのか。四季の遊びや一年の風流事は、目で読むだけにしておいてはならない。自分で暇をみつめて楽しみを探すべきなのだ。（しかし）もはやいたしかたない。わたしの余生もあとどれくらいだろう。（それなのに）何故だろうか、いつもまだ充分ではないと思ってしまう。物事の道理に通じた人は（わたしのこの）言葉を理解し、ここにおいて感慨をいだくことだろう。

*25 西冷橋―注11参照。唐一庵公―明代の心学家である唐枢（一四九七―一五七四）のこと（『明史』列伝九四、『明儒学案』卷四〇）。一庵先生と呼ばれた。嘉靖五年（一五二六）の進士。著書多数。西湖付近の雲栖に住した蓮池大師株宏の『竹窓二筆』一二六条にも記事がある。高濂と唐枢の関係については未詳。ちなみに、株宏の『竹窓初筆』一六〇条には、当時の呉郡で刊行されていた株宏仮託の『禪余空諦』なる坊刻本の存在が記され、株宏自身はこのようなものが自分の著作であるわけがないと一蹴している。ところが株宏が記すその内容を見ると、それはまさに本稿『四時幽賞』の1・6・7・9・10・13・45の各条と一致しており、『禪余空諦』なるものが『四時幽賞』の改題仮託本であることが判明する。そのような本が刊行されていたという事実から、当時の民間における株宏や『四時幽賞』のイメージ、受容の実際がうかがわれて興味深い。なおこのことは、近時の労作である荒木見悟氏監修・宋明哲学検討会訳注『竹窓隨筆―明末仏教の風景―』（二〇〇七年、中国書店）の当該条（鶴成久章氏執筆）に指摘されていないのでここに記す。紅葉は二月の花に勝る―杜牧の「山行」と題する七言絶句「遠上寒山石径斜，白雲生處有人家，停車坐愛楓林晚，霜葉紅於二月華」（『三體詩』卷上）の一句。色即是空―色とは現象界の物質的存在。そこには固定的の実体がなく空であるということ（般若心経）。

*26 宝石山―西湖北岸の山。高さ二〇〇米弱。『遊覧志』巻八に「錢王封為寿星宝石山、羅隱為之記」とある。保叔塔―注4

参照。えびの鬚―和刻本「霞鬚」、活字本・『遵生八箋』「霞須」。「蝦鬚」の音通と解する。鵲の橋―七夕の夜、織女が鵲に乗って天の川を渡るという伝説から生じたことば。『白孔六帖』に「烏鵲填河成橋度織女」とある。天の川―原文「繩河」。

*27 満家巷―龍井付近の地名のようであるが未詳。活字本「満家弄」、和刻本「満家街」。龍井―注3参照。足の弱い驢馬―原文「蹇」(にぶい馬)。『漢語大詞典』に「劣馬或跛驢」とある。靈鷲山―原文「靈鷲」。靈鷲山は釈迦が法華経などを説いたという印度の山。金粟世界―金粟如来は維摩居士のこと。また金粟は桂の別名でもある。聖なる桂の木が月の中に生えている―『酉陽雜俎』巻一天咫に、月には高さ五百丈の桂があり、呉剛というものが摘せられて、その木を切っていることなどが記されている。どうしてもいつも、平地(人間世界)で盗まれているのであろうか―官吏登用試験に合格すること、「桂を折る」というが(『晋書』郗詡伝、『蒙求』郗詡一枝)、これを含意した表現か。なお編者高濂は科挙に応じていないようだ。

*28 三塔―注7参照。鶏の声を聞く―晋の祖逖が夜に鶏の鳴き声を聞いて、これを悪声として起きて舞ったという故事がある(『晋書』卷六二列伝三二の祖逖伝)。ほととぎすの声を聞く―蜀王の杜宇(望帝)が譲位の後、ほととぎすと化して血を吐くような悲痛な声で啼いたという故事をふまえるか(『華陽国史』卷三)。

*29 勝果寺―唐代無着禪師により創建される。西湖の南、鳳凰山の付近にある。景観に優れるという。『夢尋』巻五「勝果寺」参照。現在、鳳凰山の南に聖果寺遺址がある。月岩―『遊覧志』巻七に「石壁削立有隙如鏡」とある。教場―宋代に武術を教習した所。『遊覧志』巻七に「宋殿前司采、為親軍護衛之所、俗称御校場者是也」とある。

*30 水楽洞―南高峯の南にある洞窟。水の音がよく響くという。『夢尋』巻四「烟霞石屋」参照。烟霞嶺―南高峯の南には、水楽洞・烟霞洞などの洞窟がある。石で私の歯をすすぎ―晋の孫楚の「枕流漱石」の故事をふまえるのであろう(『晋書』列伝二六孫楚伝、『世說新語』卷二五排調篇、『蒙求』孫楚漱石)。蘇軾の―蘇軾の「東陽水楽亭」に「但向空山石壁下、愛此有声無用之清流」及び「不須写入薰風絃、縱有此声無此耳」の句あり(『東坡全集』卷五)。なお『遊覧志』巻三にもある。薰風絃の曲―江南糸竹に「薰風曲」がある。

*31 資岩山―『遊覧志』巻一〇に「石笋峯、一名卓筆峯、高數十丈、円峭特立」とあり、文意から見てこのことか。石筍―鍾乳洞の床上に水が滴下し、含まれている炭酸カルシウムが沈殿・堆積して生じた筍状の突起物。靈隠寺―西湖の西にある古刹。晋の咸和元年(三二六)、僧慧理の創建。『遊覧志』巻一〇、『夢尋』巻二参照。滄海桑田―「更聞桑田變成海」の句が劉庭芝「代悲白頭翁」(『唐詩品彙』卷二五所収)にある。世の変遷のはげしいことのとえ。唐宋の遊客たち―『遊覧志』巻十には「皆趙閑道、蘇子瞻、秦少游、黄魯直諸賢留題」とある。

*32 北高峯―靈隱寺に隣接する山。海拔三二五米で杭州市内で最も高い。注3参照。『遊覧志』巻一〇、『夢尋』巻二参照。現在にはロープウェーがある。

*33 菊は花の隠者―周茂叔「愛蓮説」に、菊について「菊花之隱逸者也」とある（『古文真宝』上）。東の籬まがきのものと菊は――

*34 陶淵明の「飲酒其五」に「採菊東籬下、悠然見南山」の句あり（『陶淵明集』巻三）。陶淵明―注22参照。

乗舟風雨聽蘆―西湖十景の一つ「平湖秋月」を描いた図に、蘆の間に舟を浮かべて月を見る図柄のものがあり、孤山の付近と思われる。河橋―天目山の南に河橋という町があり、現在では古鎮として知られる。家に帰って寝ていると―原文「帰枕故丘」。故丘は、ふるさと、故郷、故山で、編者高濂は錢塘の出身である。独山・王江涇・百脚村―前二者は杭州の北東に位置する嘉興付近の地名。百脚村は未詳。

*36*35 保叔塔―注4参照。太陽―原文「陽谷」。金星―原文「啓明」。

六和塔―西湖の南約四キロ、錢塘江の河畔にある塔。宋の開宝三年に智覺禪師が江潮を鎮めるために築いたという。『遊覧志』巻二四、『夢尋』巻五参照。浙江―錢塘江の上流部を浙江と称する。潮のみなぎり―満潮が河川を遡る際に、前面が垂直の壁となつて激しく波立ちながら進行する現象。海嘯という。

*38*37 湖凍初晴遠泛―冬季の湖中の遊樂の様子としては、『陶庵夢憶』巻三「湖心亭看雪」（『岩波文庫版一四四頁』）も参照。

雪霽策蹇尋梅―これも文中に地名はないが、西溪や九溪十八澗など、郊外の梅の名所を意図していると思われる。足の弱い驢馬―注27参照。人々にあざけられることだろう……このあたり何らかの典拠があるか、未詳。

*39 三茅山―『遊覧志』巻一二に「三茅寧寿觀、在七宝山東北、本三茅堂」とある。七宝山は杭州城内の地名。呉山を形成する峯の一つという。

西溪―注5参照。

*42*41*40 両山―北高峯と南高峯（海拔二五七米）。注3参照。

天目山―浙江省の北西部、安徽省との境界にある浙西山脈中の山。東西二峰から成る。奇勝に富み仏教・道教の寺が多い。西湖から西へ約六〇キロほど。『天地鈴経』―原文「地鈴」。書物の名前とみて、『雲笈七籤』巻一一〇に出る「天地鈴経」と解した。同経は現在見当たらない。天目山は生まれつき……『天地鈴経』の逸文であろう。

*44*43 『水滸伝』―明代の『水滸伝』流行の一端については、張岱の『陶庵夢憶』巻六「水滸牌」参照（『岩波文庫版二三五頁』）。溜まり水―原文「半天河水」。竹や木のうづつの溜まり水。「風雪婦人」……以下、画題であろう。いったいどれが「真」で、どれが「仮」だと……原文「孰為真仮」。「真」「仮」の用語は明代の思想を読み解くキーワードの一つである。

*45 真空―明代の洪自誠著「菜根譚」に、「諸法の実相である真空は、単なる空無ではない。現象に執着して、それを唯一の

実在であるとするのも真実ではなく、反対に現象を破邪して、それは全くの虚妄であるとするのも真実ではない」とある(岩波文庫版三〇八頁、今井宇三郎氏訳)。「真空」も明代の宗教思想を理解するためのキーワードの一つ。なお、『菜根譚』が他ならぬ高濂の『遵生八箋』に附録されて行われたことは、岩波文庫版解説参照。弥勒菩薩―釈尊の救いに洩れた衆生を悉く済度するという未来仏。中国では布袋を弥勒の化身とする信仰がある。僧俗が芋を食べる話柄については、釈明瓚と李泌の例がある(『宋高僧伝』巻一九など)。

*46 山窓聴雪敲竹―本章も特定の地名はないが、西湖とその周辺の竹の名所としては、西湖の南西、五雲山の西にある雲栖が挙げられる。袁宏道の「雲栖小記」(『夢尋』巻五「雲栖」所引)に「雲栖在五雲山下、籃輿行竹樹中七八里始至、輿僻非常」とある。明代ここに住した蓮池大師株宏が知られる。注25参照。

*47 呉山―西湖の東岸。宋代に城隍廟が置かれた。『遊覧志』巻一二参照。現在、呉山公園として整備され、城隍廟が復原されている。松盆―杭州の除夜の習俗。松芝の松明を燃やす。『西湖遊覧志余』巻二〇参照。

*48 鎮海樓―『遊覧志』巻一三に「旧名朝天門、呉越王錢氏建、規石為門、上架危樓、樓基疊石、高四仞有四尺」とある。玉版紙―高級な紙の一種。漉きあがった紙を骨や玉などで研磨し、固く引き締め色艶を出したという。ここでは、紙の産地として知られる剡溪(次注参照)の製品を意図するか。蘇東坡の「孫莘老寄墨四首」中に「剡藤開玉版」とあり(東坡全集一四)、剡溪の藤で玉版紙が作られていたことがわかる。また『紹興府志』物産志二に「玉版紙瑩潤如玉」とある。烏絲闌―絹本に織りなされた黒い界線。後に写本の界線をいう(『唐国史補』下等参照)。

*49 曲水―庭園などをまがり流れる水。銭を杖にさして酒を買えば……阮脩が外出の時いつも銭百文を杖の先にぶら下げて酒屋で酒を飲んだという。「杖頭銭」の故事がある(『晋書』列伝一九、『世說新語』任誕篇、「蒙求」阮宣杖頭)。少年の春―原文「少年」。青春の時。「踏花同惜少年春」(『白氏文集』巻一三)などと白居易が愛用する「少年春」と解した。陶淵明―注22注33参照。孟嘉―東晋の詩人。本文にいう「孟嘉落帽」の故事で知られる(『晋書』巻九九列伝六八、「蒙求」孟嘉落帽)。藜の杖―あかざの茎で造ったつえ。軽いので老人用とされる。剡溪―浙江省嵊県を流れる川の名。会稽山の東、山陰(紹興県)の南にあたる。山陰の王徽之(子猷)が雪の降った月夜に舟に乗って親友の戴逵(安道)をはるばる剡溪まで訪ねた故事で知られる(『晋書』列伝五〇、「世說新語」任誕篇、「蒙求」子猷尋戴)。玄圃―注1参照。もはやいたしかたない(中略)何故だろう……原文「已矣乎(中略)胡為乎」。陶淵明「歸去來辭」の後半に全く同じ構文がある(『古文真宝』上)。高濂は『四時幽賞』を著すにあたり、「歸去來辭」を意識していたのであろう。『菜根譚』にも陶淵明重視の性格が指摘されており(岩波文庫版解説)、高濂と軌を一にするものとして興味深い。